

# Gaskell の医学への期待——*North and South*, *Sylvia's Lovers, Wives and Daughters* から 見る医学の進歩

遠藤花子

## 序

Elizabeth Gaskell の作品は人間味あふれる登場人物を描いているが、結婚で物語が締めくくられるようなロマンチックな要素はなく、むしろ工業都市における人々の労苦や人生の悲哀など、人生絶頂の華やかさを超えた人々の苦しみを描いていると言ってよい。Gaskell は、病気の苦しさや、死せる人間と生きる人間の辛さを如実に訴えているが、幸福な人生のために最も大切なものは健康であり、その健康を奪った社会環境や労働状況こそ、ヴィクトリア時代の人々を苦しめた最大のものだったことを随所に述べている。

Gaskell が執筆活動を本格化させたのは、公衆衛生の開拓者、Edwin Chadwick の *Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain* (1842) が出版され、公衆衛生と病気の関連性に人々の関心が集まるようになった頃である。この頃までの医療は、医者か診察用の道具を鞆に詰め、富裕層を訪問していたが、病気を見分けられる程度であり、治療はたいてい大層不快なものであった。しかし19世紀は、社会的要因からくる疾病が深刻化する中で、様々な医学関連出版物の増加や医療機器の発明と進歩など、医学の進歩に明るい兆しが見え始めた時期でもある。それまでの医療が患者からの話を聴くことと身体検査が中心だったのに対し、19世紀は、聴診器、顕微鏡、検眼鏡、体温計、血圧計、X線機器などが医療現場で使用されるようになるなど、医者か触診と聴診を行うことによって、病気の徴候を診断することが可能になっていく (Caldwell 143; Carpenter 5)。つまり、19世紀は工場や鉱山での労働が引き起こす病や生活環境の悪さからくる疾患に人々が苦しめられた時代であった一方、医学的進歩が肌で感じられる時代であったことも事実である。

このような医学の発展の推移は、Gaskell の六つの長編小説を医学的視点から執筆順に追うと明らかになる。前半の三つの長編小説のうち、*Mary Barton* (1848) では、

医者が人々の病気を治療することは不可能なこと、*Cranford* (1853) では、医者に対する懐疑的な評価と医療体制への不満、そして *Ruth* (1853) では、病人を看病する専門職の登場と新しい医療の可能性が指摘されている。この前期長編三作品からも、医学の進歩を読み取ることができ、Gaskell 自身も時代と共に着実に医学の進歩を実感していることが分かる（遠藤）。本論文では、Gaskell の後半の三つの長編小説、*North and South* (1854-55)、*Sylvia's Lovers* (1863)、*Wives and Daughters* (1864-66) の内科的・外科的治療に焦点を当て、Gaskell が作品を通して伝えた医学の発達を医史学の視点から考察していく。

### 1. *North and South*

Gaskell の執筆活動も軌道に乗り、イギリス社会も労働者の苦しみに目を向け始めた頃に書かれた *North and South* は、医学的視点から分析すると興味深い点が多く見受けられる。労働者特有のアルコール中毒や肺疾患 (lung diseases) といった病苦だけでなく、ヴィクトリア時代の代表的な薬剤である鎮痛剤、更には医者立場と患者との関わり方など、この時代の医学の進歩が反映されている。

労働者が、いかにアルコールの摂取を必要としていたかは、Bessy の父が苦境を紛らわせるために酒場へ行こうとする場面からも一目瞭然である。また、38 章では Leonards の死因について、外科医は次のように説明する。

...there was an internal disease of long standing, caused by Leonards' habit of drinking to excess; that the fact of his becoming rapidly worse while in a state of intoxication, settled the question as to whether the last fatal attack was caused by excess of driving, or the fall (370).

過度の飲酒により内臓の病気が誘発されることは、*North and South* が執筆される何世紀も前から認識されていたことであり、Bessy の最期の言葉も「父を飲酒から遠ざけて」（257）と父に対して禁酒を促すように訴えている。しかし、それにもかかわらず、労働者にとっての飲酒は不可欠なものであった。ヴィクトリア時代、酒場は巨大な市場となり、“the gin-palace” と呼ばれる派手な造りの安酒場が考案された。労働者階級を誘惑する酒をふんだんに供給する居酒屋は、彼らに裕福な消費者になった錯覚を起こさせるものであった (Linnane 126)。そして居酒屋における無秩序で破壊的な労働者の醜態は収拾がつかなくなっていた。居酒屋が重い労働とそ

の苦痛を和らげる役割を果たしていたのは、この時代の特徴と言えよう。具体的には、1850年のマンチェスターには、40万人の住民に対して1600軒の酒場（住民250人に対して1軒の酒場）があった（立川128）というデータが残されている。

アルコール中毒患者は増加の一途をたどるが、アメリカの影響を受けてイギリスが本格的に禁酒に乗り出し始めるのは、1870年以降になってからのことである。現に、Gaskellの夫が1820年代末から30年代初頭にかけて禁酒運動に携わっていた（波多野22-23）ことから、Gaskellが禁酒の必要性を理解していたことは言うまでもない。イギリスで禁酒運動が広まったのは、医師たちが健康被害を明確にし、大勢の人々が書物を通して、直接的・間接的に労働者の飲酒について訴えた結果と言える。しかし、*North and South*の医師は労働者の体調管理をすることはなく、飲酒に対しても医師が関与することもない。医師たちの労働者への無関心はかなり顕著なものとなっているが、このことこそがギaskellが扱った社会問題なのである。

過剰労働や汚染された空気、栄養失調などによって生じる肺疾患もまた、労働者特有の病である。*North and South*の中でも肺疾患に罹って亡くなっていくBessyの姿は、最も印象深く読者の脳裏に焼き付くにちがいない。産業革命中、Bessyのような労働者を最も苦しめたのが肺疾患であり、肺疾患はコレラと天然痘を併せた死者より多くの死者を出した（Byrne 1）。肺疾患は「社会経済が農村型から産業型に移行していく転換期」に急増する（立川141）と言われ、ヴィクトリア時代、あるいは産業革命を語る上で密接な関係にある。Engelsは、大都市の有害な空気のせいで「肺が十分な量の酸素をうけとらないために住民は肉体的にも精神的にも無気力となり、生命力も抑圧される」（エンゲルス 上192）ことを指摘している。Manchesterの紡績工場の糸ぼこり等を吸い込むことによって起こる「吐血、ひゅうひゅうという苦しい呼吸、胸痛、せき、不眠症、つまり喘息のあらゆる症状」（上20）など、Engelsの述べた労働者の健康被害に関する報告は枚挙にいとまがない。

また、過酷な労働環境のみならず、大都市の環境そのものが病気を引き起こしていたことは言うまでもない。例えば、1840年代のBradfordでは、溢れ出した屋外トイレや汚物だめ、廃棄物で溢れた水路などで混沌としていた。家も230軒に1450人が住んでいたが、これは3人で1つのベッドと40人で1つのトイレを使っていたことになる（Clare 30-31）。こういった場所では、コレラやチフスなどの伝染病が度々発生したが、これはBradfordに限ったことではなかった。EngelsもManchesterの瘴気性のガスと悪臭、無数のごみや排泄物、古くて窓ガラスや窓枠のない建物など、（上108-15）世界に誇れる工場都市の混沌とした実態を強く主張し

ている。

このような環境の中で、労働者の生活水準を向上させる必要性があったことを知りながら、慈善家めいたことをして満足していた Margaret のような人がどれだけいたかを考えると非常に痛ましい。Margaret と Bessy の間には身分を超えた友情があったという見方もできるかもしれないが、また、Bessy が Margaret を慕っていたことも確かであるが、Margaret は Bessy の見舞いに訪れた時、Bessy のために医者を呼んだこともなく、薬を届けたこともなく、また、*Cranford* の中で医療費を出してくれる Lady Glenmire のような存在でもない。Margaret は僅かなお金を Bessy に握らせたことはあったが、労働者のストライキの理由や貧しい生活がどのようなものかも知らず、労働者の苦しさに理解がないことを指摘されると、母の状態が悪いことを理由に帰っていく。貧困層の少女と親しく交流することが慈善活動に繋がると思い込んでいる Margaret にとっては、労働者を苦しめている要因の改善のことまで考える余地はないことが分かる。このことから、Margaret は本当の慈善家になれなかったと言える。

1834 年には救貧法改正法 (An Act for the Amendment and Better Administration of the Laws Relating to the Poor in England and Wales) が施行され、また、肺疾患に関する医学的出版物の数は 1830 年代から 1840 年代の間に 3 倍に増加している。実際には肺の病気に苦しむ労働者のために書かれたものではなかったが、これに伴い、この 10 年は産業革命が始まって以来、肺疾患患者が初めて減少した期間であった (Byrne 12) ことを考えると、*North and South* が書かれた時には、このような患者は減少しつつあったことになる。Bessy の死を描いた Gaskell の怒りの矛先は、肺疾患を患う労働者を救済しようとしなかった工場主や、肺疾患患者減少に向けて生活環境を向上させようとしなかった大都市の行政、更には労働者階級の患者には滅多に目を向けることさえしなかった医者たちに向けられていると言えるだろう。

一方、労働者階級ではなく、富裕層患者の病気治療に焦点を当てると、この時代の今までにない目覚ましい治療技術の進歩を鎮痛剤の発達から確認することができる。Dr. Donaldson が初めて Margaret の母 (Mrs. Hale) の診察に来た時、彼は “the late discoveries of medical science have given us large power of alleviation” (148) と痛み緩和薬の進歩について述べている。Dr. Donaldson の施す治療も定期的に行う緩和治療であり、薬による処置が中心であるが、それが功を奏している (179) ことも述べられている。薬の種類については、最初は “alleviation” や “medicine” と薬の名前や種類は明らかにされていなかったが、Mrs. Hale が 21 章で Margaret と Mr. Hale

の留守中に発作 (spasm) を起こして以降、Dr. Donaldson は鎮静剤 (opiate) を繰り返し使うようになる (198, 199, 202)。Opiate は恐らく当時の薬局で一般に市販されていた阿片チンキ<sup>1</sup>や丸剤と推察される。これらの薬はロンドンを始めとする大都市の薬局で大量に販売されていた<sup>2</sup>ため、人々は鎮痛や下痢止め、鎮咳、不眠症の薬として、自由に阿片を使うことが可能であった (山崎 160)。この opiate も新薬であるかのように言われているが、阿片が新しい形で売られるようになったにすぎず、古代よりヨーロッパで、マンダラゲやヒオスなどと共に鎮痛剤として使用されてきたものと同じと言っていいだろう。

しかし、Dr. Donaldson は阿片の使用方法も適切であり、Mrs. Hale の症状緩和に水敷布団 (water-bed) の使用を勧め、それによりぐっすり眠れたこと (239) も述べられている。Mrs. Hale が重篤に陥った時は、Dr. Donaldson を “the kind doctor” と肯定的な語を使いつつも、他の医者 (“some London doctors”) の助言を欲しがる場面もある (294-95) が、Dr. Donaldson は Mrs. Hale の病気の回復見込みがないこと、痛みの緩和をすることしかできないこと、医者としてなす術がないこと、死期が近いことを宣言し、実際にその通りになる。Gaskell 初期の長編小説と比較すると、医者に落胆させられる回数が減少してきているのは確実である。

1850 年以降、医学面においても、診察により具体的に病因を指摘できるようになり、患者の回復は見込めなくとも、薬で楽にすることが可能になった。痛みの緩和は治療ではなく、あくまでも対症療法だが、鎮痛の作用から気分を和らげることは可能になった。*North and South* が書かれた頃は、薬の開発が促進し、薬を購入しやすくなったことを感じられるようになってきた頃だが、貧しい労働者が十分な医療を受けられなかったことや薬を購入できなかったことを浮彫りにしている。ここで強調すべきことは、痛みを和らげる薬の進歩に加え、Hale 家は労働者と比べると薬を購入できる恵まれた経済状況にあったことから、どれだけこの環境に救われているか計り知れない、ということである。医者に診てもらい、病気の回復に希望を持つことは、自分たちが労働者階級でないことを意味している。*North and South* は、病気やアルコール中毒に苦しむ労働者の姿と、医者の診察を受け、薬を投与してもらえる富裕層を描くことで、医療の実態を記録した作品と言える。

## 2. *Sylvia's Lovers*

*Sylvia's Lovers* が書かれた 1863 年は、汚染水や食物を媒介とし、チフスが流行したために死亡率が増加した期間 (1861-70) であったと同時に国家を挙げた医療の

改善や発達が飛躍的に進歩した頃でもある。*Sylvia's Lovers* を医学的視点から分析すると、*North and South* よりも進歩した医療技術に加え、外科学の発展が顕著に見られる。Sylvia がリ्यूマチにかかった母 Mrs. Robson や Hester の母 Alice Rose の介護をするなど、町の人々の暮らしに目を向けると、一般的な病人と介護体制が描かれているかのように見えるが、外科学や精神医学が扱われている。*Sylvia's Lovers* は全体を通して、戦争の生々しい記述と、戦争によって引き裂かれた恋人の運命、戦争中に負傷した人々など、いわゆる「戦争の犠牲者」を扱った作品と言っても過言ではなく、戦争と医学の視点から分析しても非常に興味深い描写が見受けられる。作品の設定は18世紀末のナポレオン戦争中であり、歴史小説 (the historical novel) とも言われる所以でもあるが、作品の中の医療に対する医者や外科医の技術は18世紀末に相応しい記述ではなく、時代錯誤が生じている。医学に関しては、むしろ作品の書かれた1863年の視点となっていることから、本論文では、19世紀の外科学の発展の視点から *Sylvia's Lovers* を探り、Gaskell の捉えた戦傷と回復に焦点を当てて考察する。

*Sylvia's Lovers* では、体内に打ち込まれた銃の弾を取り出すなど、戦場で外科的処置を施す軍医が登場する。負傷兵の治療法については、まず5章の強制徴兵隊の話の中で、銃で脇腹を撃ち抜かれた Charles Kinraid に対し、船長がラム酒を飲ませ、包帯を巻き、Monkshaven で一番の医者に弾を取ってもらったことが語られる (55)。続く6章では、Sylvia と Molly の会話の中から Kinraid は重傷を負ったがかなり回復していること、脇腹に一生消えない4つの青いあざがあり、医者は内臓出血を恐れていること、その場合、誰もそのことに気が付かないと死んでしまうかもしれないことが語られる (58-59)。また、Kinraid の負った銃創が語られる38章では、Kinraid が銃で足を射貫かれ、ひどい足の骨折 (his dangling broken leg) のために悶え苦しみ、瀕死の状態に陥るが、the ship surgeon が足の骨折を治療すると、数日間苦しんだ後に意識が戻る。戦場における治療技術の進歩が Kinraid の傷の回復をもたらすなど、軍医が治癒に成功しているのは注目すべき点である。

一方で、Sylvia を騙して結婚した Philip も自責の念に駆られて海軍に入隊し、戦場で重傷を負う。Philip は “his shattered jawbone, his burnt and blackened face, his many injuries of body” (410) のために心身を病み、長期間を病院船 (hospital ship) で過ごしている。妻 Sylvia の所へ戻ることもできず、生きる気力も失っている Philip が戦争による傷で瀕死の状態にある。しかし、Philip もまた、医者たちによる手当と手厚い看護の結果、傷が回復し、帰郷命令が出されるほどにまでなる。これまでの

Gaskell の小説と明らかに異なり、瀕死状態の患者が回復するという劇的な場面が *Sylvia's Lovers* の大きな特徴の一つとして描かれている。

外科学の歴史から見ると、16 世紀までは、普及した銃火器による負傷の処置が中心であった。しかし、銃で撃たれた傷の化膿予防に、傷口を煮えたぎった油で消毒したり、焼きゴテで焼いたりする処置が行われる程度であり、怪我人が一向に良くなることはなかった。1545 年、外科医の Ambroise Paré が戦場における外傷治療に包帯を巻くこと、止血を糸で縛ることによって行う方法を編み出した。これは、Kinraid が巻いてもらったという包帯にも象徴されている。更に、1628 年に血液循環理論を唱えた Harvey、18 世紀には人工授精法を成功させ、外科学や比較解剖学の分野で功績を遺した John Hunter (1728-93) もいる。しかし、外科学の躍進が大勢の戦傷者を救うようになるのは、1840 年代に飛躍的に進歩する全身麻酔の発見以降である。1842 年にアメリカ人の Crawford Williamson Long によるエーテルを使った無痛手術成功<sup>3</sup>や 1847 年のスコットランドの産科医 James Young Simpson がクロロホルムを分娩に使用したことにより、麻酔法が飛躍的に進歩する<sup>4</sup>。

外科医の活躍と外科学の進歩がみられる一方、経済力のある人や社会的地位のある人が中心の医療体制は、*Sylvia's Lovers* でも変わらないようである。このことは、次の Sylvia と Molly の会話から明白である。Sylvia が Molly に、あなたの従兄は医者にかかっているかと尋ねた時、Molly が “Ay, for sure” (70) と答えるが、その理由は、Molly の従兄は英雄であるゆえ、医者に診て貰うのは当然であると信じているからである。

*Sylvia's Lovers* では、患者に寄り添う医者も見ることができる。Mrs. Robson が危篤状態になって Dr. Morgan が呼ばれる場面 (356-63) で、Dr. Morgan はもはや Mrs. Robson に余命いくばくもないことを指摘するが、この時、医者は Mrs. Robson だけではなく、むしろ精神的なダメージを受けている Sylvia の心配もする。出産後から脳炎 (brain-fever) を患うなど、心身を憔悴して体調を崩している Sylvia も危険な状態にあると医者は言う。Sylvia の心身の状態を心配する医者は、夫の Philip がどこにいるのかと何度も訪ねる。医者は、Philip が行方不明になっていることと Sylvia がそれを知らないことを聞かされると、Sylvia に事実を伝える役目も担う。19 世紀になり、医者は身体の病気同様、精神の病気のコントロールの必要性を認識するが、Dr. Morgan のように、医者は病人だけでなく、その病人の家族の心配をするなど、患者やその家族の内面の治療にも取り組む姿勢を見せ始めている。

また、最終場面で Sylvia から隠れるように生きていた Philip が、Sylvia と自分の

娘の Bella が高波にさらわれたのを救い、瀕死状態になる。Philip と Sylvia の感動的な再会の場面は、2 人の医者が “his internal injury was of a mortal kind, although, as the spine was severely injured above the seat of the fatal bruise, he had no pain in the lower half of his body” (447) と診断を下す場面に導かれる。これまでの Gaskell の作品に登場する医師たちは、余命宣告や痛み止めの投与を行う程度で、治療や回復と結びつくことは行っていなかったが、ここでは、怪我の状態がどのように致命的になっているか、そしてどのような症状が出ているかを具体的に述べている。Philip の容態の悪さは、Philip への同情の眼差しと Sylvia との一刻も早い再会を促す手段となっているが、医者の手厚い介抱もまた感動をさそうものとなっている。

*Sylvia's Lovers* の医者は、外科的・内科的治療に加え、コンサルタントの役割も担っている。医療に携わる者たちは戦争中に負った外傷が原因で起こる病気、更には傷ついた心を癒す取り組みをすることさえも必要となり、また、患者の種類が多様化し、あらゆる分野の医療が求められるようになった。*Sylvia's Lovers* は、タイトルから判断すると、若者に焦点が当てられた、若者ならではの喜怒哀楽が描かれている物語に見えるが、新たな医学的側面を描き出している作品であるとも言える。そして、この医学に対する期待は、Gaskell 最後の作品、*Wives and Daughters* に受け継がれていく。

### 3. *Wives and Daughters*

*Wives and Daughters* においては、病弱な登場人物や病人、病気による死者も描かれているが、医者に対する批判はほとんど確認できないのが特徴である。医者と呼ばれる方も、“doctor”ではなく、“Mr. Gibson”や“Mr. Hall”になっている。これは、1813年の医療制度改革でそれまでの surgeons と apothecaries が “general practitioners” に呼び名が変更されたこと、そして 1830 年代から 40 年代までに医学界で “general practitioners” の呼び名が定着した後も、人々が “doctor,” “surgeon,” “apothecary” と呼ぶ傾向にあったこと、更に大学で学位を持つ “doctor” のみに “Doctor” の敬称が使われ、その他の apothecaries や surgeons の敬称は “Mister” であったこと (Carpenter 16) に起因しているのかもしれない。ここから判断すると、*Wives and Daughters* では、general practitioners (元の surgeons か apothecaries) が “Mister” と呼ばれているとも考えられるが、彼らが “Doctor” に劣らない優れた医者であることは、まず注目すべきであろう。*Cranford* においても Mr. Hoggins と呼ばれる医者が登場しているが、実際には “surgeon” や “doctor”、“a medical man”とも呼ばれ、医者と呼ばれる

混乱があると同時に、医者の評判も良くない。その一方で、*Wives and Daughters* の医者は“Mr.”と言われながらも技術・人格ともに尊敬され、町の一員として受け入れられている。*Mary Barton* に見られるように医者が「役立たず」と中傷されることもなく、*Cranford* のように医者に対する悪評判が広まることもなく、*Ruth* に登場する医者のように到着に何時間もかかることもない。*Wives and Daughters* の患者は一般的な病人がほとんどで、工場の長時間労働や戦争の犠牲者といった生命が脅かされている人物が目立って登場することはないが、医者への信頼と、これからの科学に対する期待は顕著に見られる。

いかに医者が頼りになる存在であるかは、Mr. Gibson の前任の Mr. Hall が“the skilful doctor” (29) と紹介されていること、彼の人望は厚いこと、Hollingford の住民は生から死に至るまで Mr. Hall の世話になっていることなどから明白である。Mr. Hall が引退を決心し、代診医を雇うことにした時は町中が動揺するが、Mr. Gibson への引き継ぎは成功する。町の人々は、この新しい医者の素性について噂をするが、ここに決して哀れみや疑い等の視線が注がれることはなく、町中が新しい医者を頼り、結果、大勢の人が救われることになる。

ヴィクトリア時代の医学の発展と医療改革により、有能かつ健康回復に貢献できる医者の増加の証明として、*Wives and Daughters* から具体的な例が挙げられる。Lady Cumnor が Mr. Gibson に何をしたらよいか、何を食べ、何を飲み、何を避けるべきかを決めてもらえて安心したと言っていること (116)、Mr. Gibson は評判が高まり忙しすぎる状態にあるが、それは彼の技術と経験によるものであること (372)、Lady Cumnor が Bath にいる a Doctor Snape に病気を治してもらい、再び彼に頼りたいと思っていること (319)、更に、Lady Cumnor は激しい発作とそれに伴う手術から回復し、旅行もできるようになったこと (609-10) など、これらすべては医者の技術の向上と信用度の高まりを裏付けていると言える。

ただ、Lady Cumnor が“it is such a thing to find a really clever medical man” (319) と述べているように、素晴らしい医者に出会える確率の低さも訴えられている。28章では、Cynthia が医師から渡される強壯剤 (tonics) は吐き気を催すような薬 (nauseous mixtures) であり、これを大層嫌がっていることが語られる (361) が、医者へのことは信頼し、薬も服用している。しかし、この後、Cynthia の様態の悪さを Roger が“Molly, how ill your sister is looking! ... but so often those who live together in the same house don't observe the first approaches of illness.” (362) と述べる。ここで指摘すべきは、病気に罹ったことと、その回復が見られないことを決して医者の拙劣

さを理由にしているのではなく、医者を信頼した上で発言されていることである。

*Wives and Daughters* では、科学に対する新しい取り組みや期待も見られる。Mr. Gibson は時折科学界の先端に行く人々と会い、彼らと専門分野の話をするのを楽しみとするようになる (41)。Mr. Coxe、Mr. Wynne、Mr. Gibson の三者が、「患者を治療できなければ殺すべきか？」という、いわば安楽死の問題について議論をする場面で、若き Mr. Coxe は患者を治療することができなければ、苦痛から静かに素早く解放するべきだと言い、Mr. Wynne は苦しみから救っては殺人行為とみなす人もいるかもしれないと主張し、Mr. Gibson は、治療するかあるいは殺すかを決めるのが医者のもットーであるが、儲けになる患者をすぐ殺すべきではなく、お金を払ってくれる限り、患者を生かすことは医者義務である、ただ、患者が貧民の場合は異なると言う (50-51)。かなり斬新な問いだが、医者が患者に親身になり、信用できる存在になったからこそ、このような議論を可能にしているのである。これは、精神的な苦痛を和らげる必要性を知った医者が、病気の治療だけではなく、患者の内面と正面から向き合えるようになってきた証拠でもあり、患者との対話の中で、医者は患者に何ができるかを考え始められるようになったと言える。

また、19世紀は病原菌の発見と免疫療法でも著しい進歩を遂げた時代である。Roger の自然科学研究の活躍は随所に述べられているが、Molly もまた自然科学に関心を示している。Roger が Molly に顕微鏡による観察の楽しさを教えるなど、Molly の自然科学への興味を引き出すことに成功している。実際に、顕微鏡の発達により、微細な観察が可能となり、生物の構造が明らかになり、これが大きく病原菌の発見や免疫療法につながっていることは間違いない。Roger が病院や医療体制が充分ではないアビシニア (Abyssinia) へ行くことになった時、彼は最良の特効薬とされるキニーネ (quinine) を持参する (479)。キニーネは1640年頃にイエズス会の宣教師により、ペルーからスペインに持ち込まれ、イギリスへは1665年頃に入ってきたとされている。1820年にフランス人 Pierre-Joseph Pelletier が製剤化に成功した抗マラリア薬であり (Sloan 147)、抗生物質の出現まで、熱性疾患に対する有力な治療薬の一つとして使われていたものであった。感染症の病原体の研究が進んだこの時代、特効薬の開発が促進するが、これは、帝国主義政策に伴い、その植民地に暮らす人々のためではなく、兵士や長官を熱帯特有の病気から守るためであった (Clare 9) ことは付記すべきであろう。

更に、科学技術の進歩と新しい医学の幕開けを語る上で見逃してはならないのは、Mr. Gibson と Mrs. Gibson が、もう少し後の時代に生まれていればよかったと

願っている 60 章で、Mr. Gibson が述べる、“So many new views seem to be opened in science, that I should like, if it were possible, to live till their reality was ascertained, and one saw what they led to.” (753-54)、という言葉である。

ここでの「科学における新しい視点」という見解は、今後の医学の発展に期待を抱かない限り、発言され得る言葉ではない。病気を診断するだけでなく、苦痛を和らげ、更には治療が可能になりつつある医学は、もはや役に立たないものではなく、人々に貢献できるものになり、かつ、次々と新しい発見が発表されていく時代になったことが述べられている。

*Wives and Daughters* は、*Sylvia's Lovers* と同様、病人の登場人物が少なく、病人も平凡な日常生活の中の一人として描かれているという点に特徴がある。医者は、悪い存在、特化した存在ではなく、善良な医者として地域の人々に受け入れられ、頼られ、人々の生活に溶け込んだ存在として描かれている。社会や医療制度に対する登場人物の恨みも減少している。Gaskell は、この作品を完成せずに他界するが、新しい科学の活性化を描いた作品と読むことができるだろう。*Wives and Daughters* は、医学が人々に期待と光明を与えられるようになったことを大いに反映している作品である。

## 結 論

Gaskell の長編小説に登場する医者を年代順に追う作業を通して判明したことは、悪者扱いされかねない「役に立たない医者」が最善を尽くしてくれる、生活に密着した「役に立つ医者」に徐々に変化したことである。*Mary Barton* の随所で述べられていた医学への絶望は、*Wives and Daughters* に至っては期待できるものへと転換する。*Wives and Daughters* が書かれた頃は、目覚ましい医療の進歩に期待を寄せていた時代であることは間違いなく、たとえ、満足な治療を受けられるのは一部の富裕層だけだったとしても、*Wives and Daughters* における Mr. Gibson の「科学における新しい見方が開けてきたようなので、現実になるのを確かめたい」という言葉は、いわば、死ぬ間際の Gaskell の言葉でもあり、Gaskell の見た医学への期待のすべてが込められていると言っていいだろう。

実際に、1890 年以降、様々な有効なワクチンが開発され、多くの病気の予防が可能になっていく。更に、イギリスでは 1946 年に NHS (National Health Service) が制定され、イギリス国民は病院に登録すれば、誰でも無料、あるいはわずかな費用で診察を受け、入院もできるようになった。すべての人に平等に手を差し伸べる

ことのできる医療、重病患者に対しては面倒な手続きなどなしに入院できる制度など山積した課題が一つでも解決できる世の中になることを願っていた Gaskell の思いが、ほぼ実現した形となっている。Gaskell は作家として、作品を通して医学の発展史を描き、同時に人々に医療改革の重要性を訴えた功労者であったのだ。

#### 注

本論文は、平成 26 年 6 月 7 日の「第 26 回日本ギaskell 協会例会」（於アルカディア市ヶ谷）における発表の後半部分に加筆修正を施したものである。前半部分は、「ギaskell 初期小説における医者」（『アレーティア』第 29 号, 2014, 63-75）に掲載されている。

1. チンキとはアルコール浸出液のことで、阿片チンキは頭痛薬として市販されていたものである。阿片チンキは *Confessions of an English Opium-Eater* (1821) の Thomas De Quincey が頭痛薬として購入し、以来、虜となったものであるが、阿片チンキはアルコールを同時に摂取することから De Quincey はアルコール中毒に陥ったのではないかという見方もある。阿片の危険性が指摘されるようになるのは、1803 年にドイツ人薬剤師ゼルチュルナー (Friedrich Wilhelm Adam Sertürner) が阿片からモルヒネを分離することに成功し、19 世紀末に皮下注射が発明された後のことである。
2. 実際に 1841 年に The Pharmaceutical Society of Great Britain が発足した時、誰もが自由にどのような薬でも売ることができるようになり、また人々は欲しい薬を手軽に購入することができるようになった (Holloway 86)。
3. この実験の成功を公表したのは 1849 年のことだが、42 年から 49 年までの間、1844 年の Horace Wells の笑気麻酔を使った抜歯の実験失敗や 1946 年の William Thomas Green Morton によるエーテル麻酔の公開実験の成功などから吸入麻酔法が確立する。
4. 1853 年には Queen Victoria のクロロホルムを用いた無痛分娩に成功している。

#### 引用文献

Byrne, Katherine. *Tuberculosis and the Victorian Literary Imagination*. Cambridge: Cambridge UP, 2011.  
Caldwell, Janis McLaren. *Literature and Medicine in Nineteenth-Century Britain: From Mary Shelley to*

- George Eliot*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Carpenter, Mary Wilson. *Health, Medicine, and Society in Victorian England*. Santa Barbara: ABC Clio, 2010.
- Clare, John D. *Medicine in the Industrial World*. London: Wayland, 2006.
- Gaskell, Elizabeth. *The Works of Mrs. Gaskell: North and South*. Vol. 4. London: Murry, 1906.
- . *Sylvia's Lovers*. 1863. London: Penguin, 1996.
- . *The Works of Mrs. Gaskell: Wives and Daughters*. Vol. 8. London: Murry, 1919.
- Harrison, Brian. *Drink & the Victorians: The Temperance Question in England 1815-1872*. Keele: Keele UP, 1994.
- Holloway, S. W. F. "The Regulation of the Supply of Drugs in Britain Before 1868." *Drugs and Narcotics in History*. Eds. Roy Porter and Mikuláš Teich. Cambridge: Cambridge UP, 1995. 77-96.
- Linnane, Fergus. *Drinking for England: The Great English Drinkers and Their Times*. London: JR, 2008.
- Nicholls, James. *The Politics of Alcohol: A History of the Drink Question in England*. Manchester: Manchester UP, 2009.
- Porter, Roy. *Disease, Medicine and Society in England, 1550-1860*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Sloan, A. W. *English Medicine in the Seventeenth Century*. Durham: Durham Academic P, 1996.
- Woodward, John, and David Richards, eds. *Health Care and Popular Medicine in Nineteenth Century England*. London: Helm, 1977.
- フリードリヒ・エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態——19世紀のロンドンとマンチェスター（上・下）』一條和生・杉山忠平訳, 岩波書店, 1990.
- 遠藤花子「ギヤスケル初期小説における医者」『アレーティア』第29号, 2014. 63-75.
- 小山路男『イギリス救貧法史論』日本評論新社, 1962.
- 立川昭二『病気の社会史 文明に探る病因』日本放送出版協会, 1971.
- 波多野葉子「“Lizzie Leigh” —— 「放蕩娘」の挫折 ——」『ギヤスケル論集』23号, 2013. 17-30.
- マクニール, H. W. 『疫病と世界史』佐々木昭夫訳, 新潮社, 1985.

(実践女子大学非常勤講師)

Abstract

Gaskell's View of Medicine: The Development of Medicine in *North and South*, *Sylvia's Lovers*, and *Wives and Daughters*

---

Hanako ENDO

---

The novels of Elizabeth Gaskell are filled with medical references. Analyzing her six novels from the perspective of the social history of medicine shows the development of medicine in the latter half of the nineteenth century. This paper ventures to reveal the improvement of medicine and the medical system through her last three novels—*North and South*, *Sylvia's Lovers*, and *Wives and Daughters*.

*North and South* tells the fact that, although doctors' visit and treatment are limited to rich people, they are skillful enough to ease symptoms by means of alleviation. Doctors are also able to point out the causes and reasons of diseases; however, as shown in Bessy, who receives no medical treatment, doctors are never helpful to poor labors suffering especially from alcoholic and consumption diseases.

In *Sylvia's Lovers*, the great improvement in surgery is pointed out throughout the novel. Despite the fact that Kinraid and Philip sustain such severe battlefield injuries, both of them make an almost perfect recovery. Also, the change in doctors' responsibility can be indicated. They take on a role as a consultant who gives advice not only to patients but also to their family members, which cannot be recognized in other Gaskell's novels.

*Wives and Daughters* is ultimately the best novel that describes proficient doctors and the hope for the new discoveries in medicine and science. In addition to doctors who are supportive enough to find the best treatment for patients, scientific development sets the major theme in this novel. The high expectation for the progress of medicine is reflected in the line by Mr. Gibson saying that he wants to live and see new views in science.